

このコラムは福祉の職場で働く人を紹介し、仕事や人の魅力を伝えます。
今回登場するのは、入職6年目の堀 瞳さん。やりがいや今後の抱負について聞きました。

※自然に福祉の道へ

同居の祖母が大好きで、小さい頃から高齢者が身近だったせいも、自然に福祉の道へ進みました。一般企業、知的障がい者施設の勤務を経て、育児が落ち着いたころ、ホームヘルパーとして社協に就職。6年前から職員として働きはじめました。

※笑顔を力に

現在は、CSWや地区福祉委員会、日常生活自立支援事業を主に担当しています。

地区福祉委員のみなさんが、和気あいあいと笑顔で活動されているのを見ると、私まで笑顔になります。地域のためにがんばる姿に力をもっています。

※声かけからはじまる

面談の時はなるべく明るく接することを心がけています。できぬことを認めながら本人に寄り添い、今後のことを一緒に考えます。

また、地域の人から話しかけられやすい人になれるよう、自分から積極的に声をかけるようにしています。気軽に声をかけあえる関

係は、よりよい地域づくりにもつながると感じています。

※誰からも頼られる人に

ひきこもり、不登校など解決が難しい相談も多く、CSWとして悩むこともあります。そんな時は頼れる職場の先輩にアドバイスをもらいます。また、大好きな子どもたちとおいしものを食べにでかけることもりフレッシュに。福祉以外の知識も吸収し、経験を積み重ねることで、誰からも頼られる人になりたいです。

※笑顔の輪をひろげたい

ひきこもりの方など誰もが気軽に集える居場所を、地域の人や関係機関、みんなで協力してつくれたらと思っています。ひとりでも多くの方が地域活動に参加し、楽しさを感じてほしい。笑顔の輪がどんどんひろがっていくような地域をつくりたいです。



社会福祉法人
豊能町社会福祉協議会
コミュニティソーシャルワーカー
ほり ひとみ
堀 瞳さん

ふくしを巡る 歴史探訪

No.18

警察官と地域福祉

中村三徳の実践(1)

児童虐待や認知症の対応など、さまざまな場面で福祉と連携を図り、市民の生活を守る警察。今号と次号にわたりセツルメント活動に取り組んだ警察官、中村三徳(1873年〜1964年)の活動実践を振り返りながら福祉と警察のつながりを見ていくぞい。

大阪自彊館の運営が軌道に乗りはじめた大正4(1915)年、難波警察署長として貧困層の生活状況実地調査を実施。その報告書では、「貧困層の住民を救済するには、①食料の質をあげる、②清潔な衣服を身に着けて住みよい住居に住むことで不摂生をなくして伝染病を防ぐ、③低利の質屋を設置して物品を貸し付け、労働資金を生み出すべきだ」と、衣食住と労働のための資金調達がそろった施設の必要性を説いたんじや。

その後、三徳は中河内郡長(現在の八尾市)に転出。そこで出会った吉村敏男とともに、家族で入居できる「向上館」、保育所、泉尾公益質屋など、事業をピョーンと飛躍的に展開してゆくのぞい。



現在の社会福祉法人 大阪自彊館



ケ口福